它山廟の稲花会について

松田吉郎

はじめに

筆者は二〇〇五年～二〇〇九年の五ヵ年間、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―」（領域代表　東京大学小島毅先生）の「寧波地域の水利開発と環境」班の代表を勤め、寧波地域の水利研究を行っている。

寧波地域は唐代九世紀に王元暐が它山堰を建設してから、西部地域は従来の広徳湖に加え、它山堰が水利灌漑の主要施設となり、東部地域は従来からの東錢湖が水利灌漑を担った。しかし、政和七年（一一一七）樓异が広徳湖を湖田化し、その八〇〇頃の水田の租を高麗使節の接待費とすることにより、寧波地域の水利は它山堰と東錢湖水利に限定され、寧波西部地域の主要水利施設は它山堰となった。

この它山堰を建設した王元暐に対しては寧波の人々の信奉は厚く、旧暦三月三日、六月六日、一〇月一〇日の年三回廟会が行われてきた。その中でも最大のものは六月六日の稲花会であった。

この稲花会は一九四五年に開催されてから長らく実施されず、二〇〇九年十一月二六日（木）に六四年ぶりに復活することになった。筆者は它山堰文物保護管理事務所の陳思光氏より教えて戴き、稲花会を見学することが

できた。

本稿は陳思光氏の稲花会研究の成果と二〇〇九年十一月二六日の稲花会の様子を参考にまとめたものである。

Ⅰ　『鄞江橋』（陳思光）に見える稲花会

陳思光氏は一九四八年生で現在六〇歳、二〇〇九年十一月まで它山堰文物保護管理所所長を勤めていた。この它山堰文物保護管理所は它山堰を創建した王元暐を祭る它山廟境内にある。陳思光氏は『歴史名鎮　鄞江橋　地方古掌　参考資料』（出版年は不明）を著しているが、筆者は二〇〇六年に陳思光氏より同書を戴いた。同書の編後記によると、陳思光氏は老人の口碑伝説と関係者から収集した資料によって同書を作成したと述べている。

同書所収の陳思光著「鄞江鎮的歴史沿革和変遷」によると鄞江鎮は古代、鄞江鎮の中心地であった。

東晋隆安四年（四〇〇）に劉裕が句章（現在の鄞江鎮）に駐屯し、隆安五年（四〇一）に句章の地に県城を遷すことを決定した。隋代鄞県・鄮県・餘姚の三県を句章とし、県治は継続して小溪鎮（現在の鄞江鎮）に置かれた。唐開元二六年（七三八）に明州が置かれたが、州治・県治はともに小溪に置かれ、小溪は州の大鎮であった。大暦六年（七七一）に鄮県県治を寧波三江口（現在の寧波の中心地）に移したが、州治は小溪のままであった。長慶元年（八二一）鄮県治は小溪に戻り、州治は寧波三江口に移った。以後、小溪鎮は光溪鎮と呼ばれるようになった。

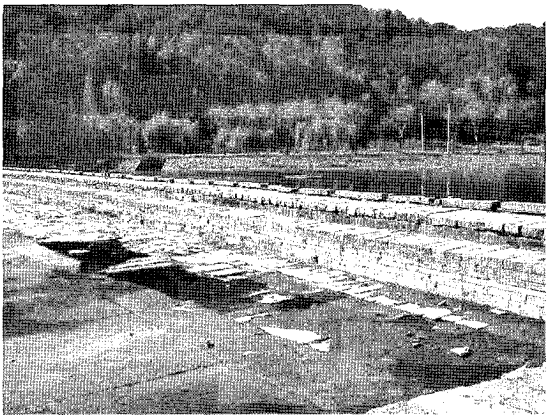
そして、唐太和七年（八三三）、鄮県令王元暐が光溪鎮（現在の鄞江鎮）に它山堰を設置し、光溪鎮並び寧波西部の農村部、三江口の都市部に水を供給した。こうして寧波西部～三江口地域の水利が整ったことにより、五代初期九〇九年に県治も三江口に移り、光溪鎮（鄞江鎮）は寧波の政治的中心地から退いた。

しかし、鄞江鎮の人々を含め、寧波の人々は王元暐を崇拝し続けた。『乾道四明図経』（南宋乾道五年〈一一六九〉、張津纂集）巻二によると、次のように記されている。

它山堰善政侯廟在縣西南四十里、以廟碑考之、蓋唐太和中（八二七～八三五）邑宰琅琊王侯諱元暐之祠也、先是厥土連江、厥田宜稻、每風濤作沴、或水旱成災、侯乃命採石於山、爲堤爲防、迴流於川、以灌以溉、通乎潤下之澤、建乎不拔之基、能於歲時大獲民利、自它山堰溉良田　者凡數千頃、故鄉民德之、立祠以祀、後封爲善政侯、皇朝乾道四年（一一六八）七月八日有旨、賜遺德廟額、知縣事揚布書、太守直閣張公津之所立也

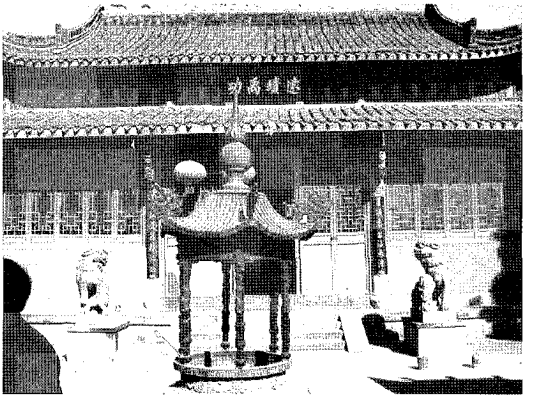
它山堰の善政侯廟（即ち、它山廟）は鄞県（現在の寧波三江口）から西南四〇里（約二〇㎞）の所にある。廟碑によると、唐太和年間（八二七～八三五）鄞県令の王元暐を祭った祠堂である。它山堰が築かれたことにより数千頃（一頃は五・六ha）が灌漑できるようになり、郷民が王元暐の業績を徳とし、祠堂（廟）を建て祭祀した。後に王元暐は善政侯に封ぜられ、南宋乾道四年（一一六八）七月八日に朝廷からの詔により遺徳廟の額を戴いた。同廟は善政侯廟と言われたり、它山遺徳廟と言われ、俗に它山廟と言われ、人々に崇拝されている。

南宋淳祐九年（一一八二）に王元暐は霊徳侯に封ぜられ、清嘉慶一〇年（一八〇五）に孚恵侯が加封された。道光二一年（一八四一）に它山廟は重修された。(1)



（它山堰　2005年12月撮影）

它山廟の廟会は旧暦の三月三日、六月六日、一〇月一〇日の三回ある。六月六日は稲花会と呼ばれ、最大のものである。一〇月一〇日は王元暐の誕生日であり、它山堰の建設日でもあったので祝われている。



（它山廟　2005年12月撮影）

（它山廟内の王元暐像　2005年12月撮影）

さて、この旧暦六月六日の稲花会については『鄞江橋』（陳思光）鄞江橋的風情習俗、稲花会に記されている。以下、その内容を見てみよう。

〝六月六〟稲花会は鄞江橋諸多の行会の中で規模が最大、範囲も最大の民間行会である。唐宋二代は掏沙会[2]と称し、明清以後は太平会と称した。

稲花会はその名の示すとおり、稲谷開花時の農閑期の節句である。

唐太和年間に它山堰が建設される前、光溪及び北溪古港一帯は、洪水の衝撃により常に砂石で淤塞した。二皎の水は樟溪より平水潭をへて鄞江に直下し、淡水は蓄積出来にくかった。鄞西の梅園・蜃蛟・鳳嚳・古林等の地の郷民は淡水を用い難いという苦労があった。六月六日前後の農閑期、民衆は自発的に組織し、土箕、扁担、沙耙などの掏沙道具を携帯し、鄞江橋光溪と北溪港の二地で掏沙し、河道を疎通し、引水して洗浄灌漑した。付近の市販商賈もまた紛々と鄞江橋にあつまり商業を営んだ。しばらくして鄞江橋独特の会市となり、俗に掏沙会と称した。

它山堰は建設後、鄞西七郷の農耕・飲料水の水源となり、郷民は鄞江橋に来て掏沙する必要がなくなったが、人々は六月六日の掏沙会を記憶していた。毎年、鄞江橋に集まる日は遂に三月三日、一〇月一〇日以外に別の廟会、即ち、俗称、稲花会となった。

〃稲花会〃は〃太平会〃とも称した。

社会的原因によるのであるが、当時毎年の夏季の到来によって、各種各様の伝染病、疫病が発生した。同時に封建社会の旧思想意識から当坊の習俗では香を焚き沐浴し、上蒼（上天）に告げた。香灰を食し、浄水を飲み、神霊の庇護を求め、太平を祈祷した。続いて它山遺徳廟王元暐公の神像に出駕して各方面への巡視を求め、平安を求め、豊作を願った。

唐宋以来、既に掏沙会があった。

南宋初期、高宗趙構が都を杭州に定め、浙東地区の経済文化もまた繁栄した。

稲花会は先に民社が自発的に行会を組織し、後に徐々に廟が組織する整った廟会隊伍に変わった。清軍が入関し、康熙年間、清皇朝、応天順民のために廟会を発展させた。明清両代の〃六月六日〃廟会の盛況は以下のよう

である。

〃六月六日〃 稲花会の会期は三日間で、即ち初五日から初七日まで、鄞江橋它山廟界下には合計四大堡、十二小堡あり、その下に十五個の自然村があった。各村坊に一人の柱首を設け、柱首は各村・各堡より先賢達人を選んで充当し、廟会を主担し、廟会下の一切の事宜を差配した。

廟会の下に十会一社を設け、柱と称した。議事を柱と称し、行会を会と称し、十会一社を一緒にして一支行会の隊伍を作った。

十会一社及びその主司の職責は以下の通りである。

伏頭会：廟神王令公（王元暐）の帽子を専管した。

揺鈴会：廟神王令公の袍服を専管した。

火符会：王令公出殿時の照明器具を専管した。

鑾駕会：神轎前の二十四件の儀仗鑾駕[3]を専管した。

揺堂会：王令公神轎の昇降を専管した。

九如会：廟会の演戯を専管した。

河台会：官池河で船を雇って行う河台戯の上演を専管した。

供会　：上供、爵献、祭祀を専管した。

炮担会：神轎出殿時の全ての火炮器具を専管した。

善慶龍会：老龍の護駕を専管した。

銃爆社：三眼銅銃で驅邪助威を専管した。

この十会一社は銃爆社が句章郷懸慈村によって組織されるのを除き、その他の十会は它山廟界下の弟子が組織したものである。

廟会は六月五日に開始し、它山堰により利益を受け它山遺徳廟より恩恵を受けている段塘の郷民が自発的に百官船三隻を組織した。六月四日、河台会より通知し、船を操縦して鄞江橋官池河に到着し、五日に官池河中において河台戯の上演を開始した。戯劇の種類の多くは徽板戯であり、《鴻善劇団》と名付けられた。また戯子の多くは老演員であり、価鈿（出演料・衣装代）は比較的安かった。中には演員に扮した者がおり、演唱時命がけで頭を揺らして発声し、鄞江橋の人がいう老話の〝老大鴻善徽板、落落動生三〟であった。

六月五日午前、廟会の総首柱台は十会一社の各柱首を集め它山廟で議事させ、〝六月六〟の廟神の出殿行会の順序、人数等を按排し、各々その職責を担当した。

六月五日

午の刻（午前十二時）：王令公の神像前で香を焚き上供する。

未の刻（午後　二時）：遺徳廟の廟祝が身を清め沐浴する。

申の刻（午後　四時）：菩薩の身を清め、胡麻油で顔を塗る。

酉の刻（午後　六時）：揺鈴会が神袍を奉り菩薩は新袍に衣替えする。

戌の刻（午後　八時）：祈祷の儀仗程は当坊の名宦・仕紳・長者が跪き祭祀する。

亥の刻（午後一〇時）：四方の郷民が各々参拝し祭祀する。

六月六日

子の刻（午後十二時）：炮担会が登場し炮（爆竹）を鳴らし、菩薩・王令公を轎に乗せ出発する。時刻になり

廟祝が菩薩に背を向けて出殿し、神が轎内に入り、伏頭会は神に帽子をお供えする。神の帽子の二つの摭耳（耳飾）を黄金で作り、神の帽子の最後部を上にして、不測の事態を防いだ。神轎の前には摭板一枚をおき、参湯一盞・糕点二色をお供えした。白折扇一巴をもって、王令公の右手に挿し、白手拍一個を王令公の右手に置いた。一切の準備が整い、殿内外で炮声がおこり、鄞溪村周家善慶龍会尚化山老龍が急いで駕籠を守って来た。

丑の刻から寅の刻（午前二時～四時）、行会隊伍は始動・出発する。

〃六月六〃稲花会行会隊伍、行会ルート及び各供地点の概略は以下の通りである。

六月六稲花会後会隊伍の次序。

令箭が一人おり、行会隊伍の先頭にいて、次の供点に神轎を迎えるように通知し、お供えを奉り祭祀する、後には報馬と呼ばれた。

銃爆社の三～四人は三眼の銅銃を撃ち、沿道の邪気を払い景気を添えた。

炮担会はその後ろに随従し、炮（爆竹）・杖（ステッキ）・登地炮を持ち、隊伍の両側に沿い壮威を添えた。

吹号（ラッパ）二人・嗩吶（チャルメラ）数人が音を鳴らした。

舞獅（獅子舞）一対、彩球（紅緑の絹布で作った球形の飾り、クス球）一個。これは清代康熙雍正年間に盛んに行われたが、乾隆年間にいたって中断した。

火籃（火の入った籠）四杯をもった会隊が先導した。また別に松油（タイマツ）の柴爿（小さい形に割りさいた竹・木）を肩に担いで火籃に燃料を添加する。

旗鑼（旗や銅鑼）二面。郷民四人が旗鑼を肩に担ぎ王令公のために銅鑼を鳴らし道を開いて先導する。

大紅孛薺（大きな紅色のくろぐわい：赤提灯）四個に蝋燭を点灯し、王令公のために照明する。提灯には〃鄮

縣、正堂、肅清、回避〃文字が書かれている。

硬脚牌（札）四個、白地に〃鄧縣、正堂、肅清、回避〃の赤字が記されている。

皂隷（召使）四人、手に水火棍(4)をもち、俗に紅黒帽・烏黒帽と呼ばれた。

鑾駕神轎（王元暐の塑像を載せた神輿）が中央にあって、郷民八人が輪流で神轎を肩で担ぎ、神轎の両側は二四個の全副鑾駕（鈴の飾り）で飾られている。王令公は神轎の中に坐り、右手に扇をもち、左手に帕（頭巾）を握り、満面紅色に光り、容姿が生き生きとしている。神轎の両旁には彩旗がはためき、爆竹の音が鳴り止まない。郷民百姓が争って神轎を担ごうとし、鑾駕神轎は全行会隊伍の中心である。

神轎の後ろにぴったりと従っているのは搖堂会一人であり、〃唱達郎〃と呼ばれた。

神轎の後ろには皂隷四人がつづき、孛齊（赤提灯）四個を点灯して持っていた。

善慶龍会は尚化山老龍神轎（龍図の描かれた神輿）の後ろを保護した。元々老龍を保護することを九節といい、民国初期に十二節といわれるようになった。

殿後犯人の二〇人前後は廟界弟子の懺悔、願掛け、贖罪などを表した。身体に紅背心を着て、銅細穿細の大架（大枠）・脚鐐（足枷）・手銬（手錠）を懸け、罪人の誠心を示した。

最後尾に郷民の弟子が各種各様、色とりどりの提灯を持ってついてきた。

これ以外に各郷・各村の客串（しろうと役者）・百姓が銃炮・彩灯・彩旗をもって補助し、並々ならぬ熱情を示した。

行会の隊伍は六月五日夜に準備を滞りなく行い、六日五更三点寅時（午前四時）に出発し、四坊の百姓は争って熱烈に見て、道を塞いだ。銃炮がパレードの先頭で芸を行い、火箭（火矢）が前方に飛ばされ、四グループの

青年壮年郷民が上半身裸になり火箭を持って乱舞し、百姓を蹴散らして道をあけさせ、行会隊伍が順調に通過できるようにした。

令箭[5]が松明のように届き、郎官弟[6]・九如会が頭供（最初のお供えの用意）をなした。

行会隊伍は潮のような勢いであり、郎官弟・九如会の戯班は銅鑼を鳴らし、場を盛り上げ、神轎の到着を待った。搖堂会・喝達郎は〝善政侯孚恵王の王公が堂に立ち止まった〟と叫ぶ。すると各皂隷・硬脚牌手・灯手等は〝よし〟と叫ぶ。神轎が戯台の前で止まり、松里の郷民弟子はすぐに浄茶・臉水（洗面水）・花色糕点（餅菓子）四色・季節の果物二色を用意し、八仙卓に載せ、紅色の良質絹布で蓋い、王令公に差し出した。郷民弟子は祭祀し、犯人は跪いて謝罪した。王令公は祭祀を受け演劇をご覧になり、一本の線香が燃え尽きる時間で祭祀は終わる。炮担会が爆竹を鳴らし、搖堂会・喝達郎がよしと唱え、〝善政侯孚恵王の王公が堂を出られる〟と唱える。多くの皂隷・硬脚牌手・灯手が〝よし〟と呼号する。その声は雷のようであり、衙役が堂で威圧するような声であった。郷民弟子がお供えを撤収した。令箭が先行し、次のお供えの龍王堂に報告した。

龍王堂の朱・王二姓は大興巷下頭南端、元鄞江衛生院旁の小溪港橋下段にいる。

官池河の河台戯は宵通しで翌朝まで行われ、老大鴻善徽板は銅鑼を叩いた。神轎が街路を抜け官池塘まで来て、河台戯も神轎に従って龍王堂前に移り、官塘河両岸は大騒ぎになり、郷民は狂ったように叫び、ここを大供の地点とした。その供祭の方式は〝郎官弟〟がお供えとお祭りをした。以下は行会のルートと順序である（『民国鄞県通志』所収の地図を参照されたい）。

定山橋：小供

界牌下（界牌下、現在は下呂家村）：大供、戯劇が催された。

百勝廟：小供
百梁橋：社田里鮑家墈を過ぎ、供点はない。
懸慈廟：小供
大徳里・崗山岭・問水亭を過ぎた所。
晴江岸：小供
邵家：小供
烏頭門を過ぎる。
周家：大供、戯劇がある。
鍾家：通過。
毛家：小供。
光溪村鍾祠：小供。
大栲樹下：大供。九如会の演戯がある。現在は鄞江鎮政府の前。

行会隊伍が通過する路線には合計十二箇所の供点があり、その中に、大供が五箇所あり、最大の供点は光溪村大栲樹下である。各村各堡の経済的実力により多い時には廟会戯が五台あったこともある。

稲花会行会隊伍は午後五時頃に光溪村上河頭大栲樹下に到着し、当坊の弟子によって王令公の神轎にお供えと祭祀がなされるこの時間が最も長かった。行会隊伍には晩餐が供された。二更（午後九時～十一時）頃、王令公は殿（它山廟）に帰り、行会は終了し、近隣郷村の客串・炮会・灯会も帰った。

稲花会の行会ルートは鄞江、洞橋、寧峰、句章の四郷鎮、全行程四〇華里（約二〇㎞）である。

六月七日、官池河鴻善戯班子は它山廟内に遷り、安神戯を演じる。

〃六月六〃 稲花会の行会全過程で非常に熱烈壮観な神轎を争って担ぐこの祭祀は江南数省でも屈指のものである。

行会の隊伍・神轎が通過する所では、各村各堡は先に石灰で白線の標識をつけた。神轎がまだ境内に到着しない時、各村・各堡・各族は各々一〇名の精壮者を派遣して境内の神轎を担ぎ、決して先方の弟子には境内に越境させない。もし雷池（境界）を一歩でも越境すれば犯衆（違反者）となる。各地の郷紳、各村の族長は青年・若者に時間を早めるように命じ、速く急いで神轎を担ぎ運び入れ、できるだけ神轎を境界内に長く留めれば当坊の平安が保たれると考えられた。

廟会行会の規定は、一地点の供点が終われば次の供点の境界で神轎をお迎えする。しかし、各村各族は神轎をできるだけ長い時間境界内に留めおきたいために相互に神轎の奪い合いが起り、さらに神轎を担がない青年がその間に紛れ込んで、神轎を担いだ。僧侶が多く粥は少ない（物が少ないのに分配を願う人は多い）の喩えの通り、多くのものは神轎を担げず、手で神轎・担ぎ棒に触れるだけでも、来年の幸運が得られると思っている。神轎が第一供点から第二供点にいたる境界線上では、現今の綱引競技のように引っ張り合い、神轎の進退は潮の満干のようであった。三歩進めば十歩退き、十歩進めば三歩退いた。神轎の前進は困難で、郷民同士の争いは激烈で、喧嘩となり、お互いに殴りあった。お互いに押し合いをするので泥溝や田畝に落ちる者もおり、官府が出動して調停と制御を加えることがあった。この空前の景況は它山廟境界内の弟子百姓が王県令を敬い尊敬する心を持っていることを示している。

〃六月六〃 稲花会を総観すると、神轎の出殿、界内巡視が廟会の中心であるが、その市集街の盛況は決して〃

三月三〃　〃十月十〃の二大廟会には及ばない。これは稲花会の時季が灼熱の天候であったからである。当時最もよい防暑薬品は薄荷（ハッカ）であり、最もよい防暑食品は木蓮であり、木蓮の栽培方法は簡単であった。衛生条件の差により、全廟会期間中、腹下しする人が無数であり、平安を保とうとして却って平安ではなくなったとも言われている。

Ⅱ　二〇〇九年十一月二十五日の開幕式・它山文化研討会、十一月二十六日の稲花会

筆者は二〇〇九年八月に它山堰文物管理事務所で陳思光氏にお会した際に、今年二〇〇九年十一月二六日に六四年ぶりに稲花会が開かれ、これは王元暐を祭る最大祭祀であるので、陳氏から是非来なさいとお招きを受けた。

筆者は十一月二四日（火）に関西空港から飛行機で上海浦東空港に到着し、その後バスで移動し寧波大学に到着した。同大学外語学院楊建華先生より陳思光氏が明日の鄞江〃十月十〃廟会暨它山文化節（稲花会）開幕式に出るように言われていると伝え聞き、二五日に開幕式に出ることにした。

十一月二五日（水）、筆者は寧波大学外語学院日本語学科三年生の張林燕さんと一緒に参加し、張林燕さんに通訳して頂いた。

鄞江〃十月十〃廟会暨它山文化節は旧暦の六月六日節と一〇月一〇日節の合同廟会であり、筆者はその開幕式に参加した。陳思光先生（元它山堰管理事務所所長）、周時奮先生、繆復元先生（鄞州区水利局）、謝国旗先生（寧波市鄞州区文物管理委員会副主任）にお会いした。

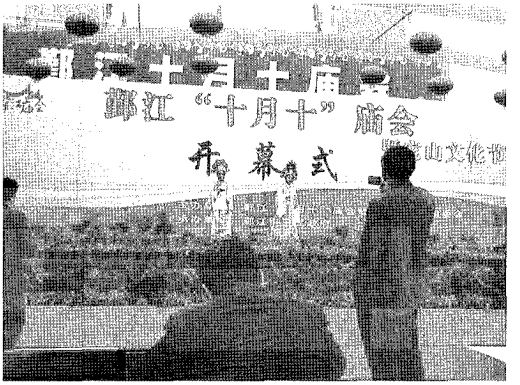
開幕式終了後、廟会を見た。廟会には寧波地元の生産物、手工業品が実演・販売されていた。その後、近くの宏陽大酒店で、陳思光先生、陳勤建設先生（華東師範大学）、陳華文先生（浙江師範大学）、趙江濱先生（寧波大

学)、毛海蛍先生(寧波大学)等と会食した。

午後二時〜五時まで宏陽大酒店六階会議室で它山文化研討会が行われた。議題と発言者の要約は以下の通りである。しかし、繆復元氏と陳思光氏は寧波語で発言されたために通訳の張林燕さんが聞き取れず、発言内容は詳細に記せなかった。

議題

1. 領導、嘉賓が着席。
2. 主持人周時奮先生が領導、嘉賓を紹介した。
3. 鄞江鎮党委員会書記毛孟軍さんが祝辞と它山文化の基本状況を述べた。
① 工作擧措・成立・中心、②戯劇文化芸術節、③博物館の建設(石博物館・民俗博物館)。④王元暐の歴史的文献、廟会について説明した。
4. 専門家の主題発言と討論
① 王元暐の歴史的位置と貢献
② 伝統廟会文化の伝承と発展



(2009年11月25日　鄞江"十月十"廟蹔它山文化節(稲花会)開幕式)

(1) 顧希佳先生が伝統的廟会の現代的意義—浙江省を例として—を報告した。

廟会は文化的象徴であり、一地方を具体的に見る事が出来るものであり、郷族文化の代表である。菩薩を中心として遺徳教化する。張襄公。菩薩の延長である。文化芸術、展覧会、演戯、演奏、人民の放松(パフォー

マンス）であり、生きた芸術である。そして物資交流でもある。問題は完全復活するかどうか、乱造とならないかどうか、心から新しい要素を入れようとしているかどうかである。研究方向は文献、民間の口述、実物の三方面から着手しなければならない。鄞江它山、鄞江文化は作為的ではなく、乱造してもいけない。

（2）繆復元先生は它山堰の地位がなぜ高いのか、三七分流について説明した。

（3）王さんは它山廟会の由来、即ち、三月三日、六月六日、一〇月一〇日を説明した。

六月六日の稲花会は民国時期に取り消された。考試？ Sun er diu Xiu yu jiang

一九五〇、六〇年代には迷信とされ廟会は取り消され、物資交流会（山・海物資大交流）となった。

王元暐を記念する祭祀（祖先の偉大さを記念する節日）の中では10月10日が最も盛大である。廟会では五穀の豊穣を報告する。菩薩の出生は人と神の溝通（三月三日、神に五穀豊穣を祈祷する）であり、老百姓が熱烈に参加している。

農耕文化・時間節湊・三個の節句は明清時期、特に清代康熙・嘉慶時期に興盛した。文化の中心であり、廟会の歴史でもある。民国一〇年（一九二一）、一九三八年、一九四三年、一九四五年には西洋文化は駄目とされ、伝統的文化しか廟会に入らなかった。しかし、一九四六年以降二〇〇九年まで、どうして六月六日の稲花会が取り消されたのか不明である。

（4）尚彦軍（中国科学院地質与地球物理研究所研究員）

地質の角度からの発言であった。

它山の文化は、以前は精髄であったが、現在は低調である。它山堰は、堰体向上傾斜であり、紅色盆地にある。河母渡：富加山・它山堰→どうして加高したか→黍積数宰などの専門的な話をされた。数字化、信速化の

研究の必要性を述べられた。

（5）陳勤建（華東師範大学）

物質的（科学技術が含まれている量が多い）・非物質的文化遺産（廟・廟会文化、勤労人民の文化である。王元暐の塑像と一〇人の工匠を祭っているのは全国初、人民が独特な歴史観を創造した。）魯迅《不…生日》。非物質文化の遺産の特徴は人との関係（経験と知恵）の記憶である。

（6）陳華文（浙江師範大学）

它山の石は玉に改めることができる（它山之石可以改訂玉、貌似也別見創新）

神聖性と世俗性の結合は相補相成である。寧波の語言の中には人と神の発音が同じである。世俗性から神聖性へ、外来文化の界入（日本の介入）。

① 神格上昇、神聖性加強、百姓の王元暐に対する崇敬の増加、今も残る。

② 以前の廟市は交易、娯楽であり、世俗性を体言していた。

廟会を通して経済・文化品味を高め、掙銭を行った。

地方精神の宣伝・凝集、地方の特色の体言、地方伝統の継承であり、政府に対して它山文化の保護とその文化の有名性を保持することを建議した。

（7）趙江濱（寧波大学）

地域の多彩、民間の文化、古代の伝統的文化遺産。文化中の明るい点は①奉仕する人、公益文化（寧波地域の色彩を帯びている）、②它山堰と連結して民間の要素と結合し科技が相当高く含有し、旅游資源でもある（《寧波方志科技巻》）。

（8）毛海蛍（寧波大学）

政府に対する意見。

廟会文化は休閑化、大衆化、旅游化の要素と結合しようとしている（寧波市民、学生の参加、定期性が出ている）。規範化（包装、DVD・明信片の制作、宣伝、外国人の参加）。

十一月二五日（水）の夜、筆者は宏陽大酒店に宿泊したが、その夜、鄞江鎮政府の四人の公務員の方と一緒に它山廟を訪問した。同廟の王元暐の塑像前において近くの道教寺院天王寺の僧侶が招かれ読経が行われ、お婆さん達の居士も集まって、僧侶に合わせて念仏を唱えていた。これらの居士は地元の人々であり、自主的に集まったものであった。僧侶を呼ぶにあたっては地元の人々がお金を出し合っていた。お経は道教の金剛経、太平経であった。陳思光氏のお母さんは百部曲を念仏しており、奥さんは朝三時から念仏しているそうである。

そして、明日の稲花会準備の様子を参観し、陳思光先生より神轎、太鼓、兵士の槍、刀などの出し物、パレード参加スタッフの着る衣装の説明を受けた。

翌十一月二六日（木）に筆者は稲花会を見学した。

この稲花会のパレードの進行・日程は以下の「十月十廟会大巡遊線路按排及時間表」の通りである。

（2009年11月25日に宏陽大酒店6階会議室で開催された它山文化研討会の様子。）

十月十廟会大巡遊線路按排及時間表

它山廟祭祀爵献精神—它山堰村上轎上供（大供）時間：7:30—王元暐路—它山堰西路—它山堰東路—水泥廠拐彎—水中東路—水中西路—它山酒家—鄞江飯店—官池中路（鄞江老街）—鄞江橋—懸慈村—懸慈文化中心上供（小供）時間：9:00—鮑家磡—秀溪橋—下江宕—環鎮東路（集市貿易街区）—定山橋老路—鳳凰山路—下呂家村（小供）時間：11:00—向明州大道西—四明東路—老車站—光溪村—小溪橋—衛生院—原光溪磚瓦上供（大供）時間：12:30—小菜場西門—鎮政府后門—李家灘—望水亭—鍾家—周家（小供）時間：1:30—鍾家過橋—晴江—麻灘—引洪橋—水中西路—王元暐路—鄞江老街—廟弄—它山堰西路—它山廟安神

筆者は朝六時三〇分から参観し、它山廟祭祀爵献精神—它山堰村上轎上供（大供）時間：7:30—王元暐路—它山堰西路—它山東路—水泥廠拐彎までは一人で見学した。

九時四〇分頃、水泥廠拐彎付近の小溪の橋で寧波大学の楊建華先生・李広志先生、学生諸君（兪如珩さん、毛巧霞さん、林梅莎さん、張思維さん、張慧滢さん、朱佩娜さん）と合流した。

稲花会には奉化からの人々も来ていた。パレードは大供では止まり、小供では通過した。各村が自発的に獅子舞などを行った。鄞江鎮政府が主催し、いくつかの団体が後援した。

パレードの集団が原光溪磚瓦廠の大供地点に入ってきたが、大供には以下のものが供えられていた（以下のお供えとその祈願内容については兪如珩さんの聞き取り調査による）。

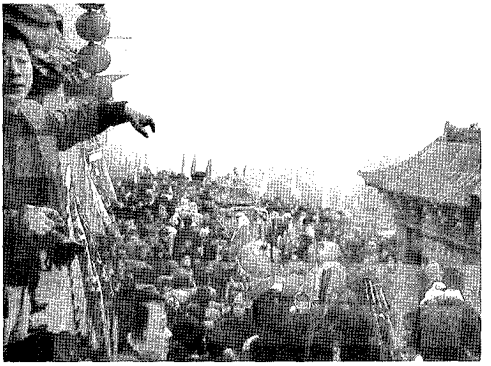
桂圓（竜眼）・柚子（文旦）・餅子（ビスケット）：団団圓圓（一家団欒）

苹果（リンゴ）：平平安安（平安無事）

葱（ねぎ）：聡明（賢い）

香蕉（バナナ）：香火延続・旺盛（子孫繁栄、長く続くこと）
長寿麺（長生き麺）：福・発・恭喜（おめでとう）
紅棗（赤いナツメ）：紅紅火火（盛んな様、生活が豊かな様）
金針菇（エゾキスゲ）：長命百歳（百歳まで長生きすること）
黄糖（赤砂糖）：子孫が皇帝になることを願う。
烤夫（焼きパン）：豊かになる。
香干（燻製の豆腐干）：バナナと同じ願い。
木耳（キクラゲ）：いいもの。
花生（落花生）：子孫が繁栄し長く続くこと。
麺包・発糕（パン・蒸しパンの一種）：豊かになる、お金を儲ける。
年糕（もち）：年年高昇（年年生活が上昇すること）。
金剛経、太平経：道教の教典。

大供に参加しているあるお婆さんは、三人の娘がいるが、二人の娘には女の子



（2009年11月26日午前7時頃、神轎が它山廟を出たところ）

（2009年11月26日原光溪碼瓦厳で行われた大供の様子）

供しか生まれなかった。しかし、仏に祈ったので一人の娘から初めて男の孫が生まれた。この男の孫は仏に祈って生まれた。菩薩の御蔭であると述べていた（この菩薩は王元暐を指している）。

午後三時半頃、它山廟安神を見る。王元暐塑像を載せた神輿（神轎）が它山廟に入り、塑像を安置した。これで稲花会は終了した。居士や参拝人が追従して它山廟に入り、押し合いへしあいの大混雑であった。

稲花会は鄞江鎮政府が主催して行った。菩薩、即ち王元暐が一〇月一〇日に出生したので、十月十節としている。六四年ぶりに行った。稲花会は一九三六年、一九四五年、一九四六年に行われ、二〇〇九年に六四年ぶりに行われた。稲花会は宣伝しなかったが、近くの者が聞きつけて集まった。これは①鄞江鎮の稲花会は寧波では大変有名であり、②王元暐は地元の人々に尊敬され、崇拝されている。即ち、昔功績を得た人は何時までも尊敬されているのである。今回の稲花会は鄞江鎮政府の指導で行ったが、民間の人々を信頼して実施した。稲花会の儀式・パレードの内容は年寄りに聞いて復活した。今年の初めから稲花会の準備をし、道具等も今年の初めから作り始めた。

パレードで行進する兵勇の武器は古代の武士が持っていたものの模型である。関羽の刀、張飛の槍などである。一八班の兵器、六種の銅の兵器である。長い兵器や剣は作らなかった。戯劇は二〜三ヶ村でさせた。しかし、河台会は復活しなかった。伏頭会・揺鈴会は民間組織で行った。他は它山廟が民間に依頼して行われた。パレードの安全のために何回も会議を開いた。老年協会を開いてパレードの路線を決めた。安全を確保してパレードの路線を決めた。関係部門・公安・ガードマンを集めて会議を開いた。二〇〇人ほどのスタッフを用い、パレードには五〇〇人ほどが参加した。稲花会全体では一〇万人ほどの人々が参加した。鄞江鎮政府はお金を出していない。各郷の老年協会が特に担当した。すべて民営で行った。稲花会は来年するかどうかは不明である。鄞江鎮人民政

府の担当者はやるという考えはもっているが、人々がやろうという意志がないとできない。稲花会は民俗文化の一種である。

八三三年一〇月一〇日に王元暐よって它山堰が作られ、また、一〇月一〇日は王元暐の誕生日でもある。元々稲花会は六月六日であるが、二〇〇九年は六月六日の節句と一〇月一〇日の節句を合同して行ったものである。它山堰遺徳廟は王元暐だけでなく、十兄弟も祭っている。これは全国でも珍しいものである。王元暐の塑像の衣服は毎年換えているそうである。

おわりに

唐代太和七年（八三三）に它山堰を建設し、寧波西部地域、三江口の都市の水利システムを作った王元暐は地域住民から信奉され、旧暦三月三日、六月六日、一〇月一〇日の三回廟会が行われてきた。その最大の廟会は六月六日の稲花会であった。稲花会は一九四五年まではある程度定期的に行われていたが、新中国になってからは長らく実施されず、本年二〇〇九年十一月二六日に六四年ぶりに復活した。

陳思光氏の研究によると稲花会の前身は它山堰が建設されまでは它山地域の光溪・北溪古港一帯が泥砂で淤塞するので、それを人々が自主的に掏沙、即ち、浚渫を行ったことにあった。它山堰建設後、堰は鄞西七郷の農耕・飲料水の水源となり、郷民は鄞江橋に来て掏沙する必要があまりなくなったが、人々は六月六日の掏沙会を記憶していた。毎年、鄞江橋に集まる日は遂に三月三日、一〇月一〇日以外に別の廟会、即ち、俗称、稲花会となった。

即ち、稲花会の元来の意味は水利向上のための掏沙＝浚渫にあったこと、它山堰が建設されてからは王元暐の

（2009年11月26日午後3時半頃、它山廟安神。王元暐の塑像が帰着した時の様子。）

偉業に対し感謝するために、稲の花が開花する農閑期の旧暦六月六日に行われた廟会であった。

六四年ぶりに復活した稲花会は鄞江鎮政府、它山堰文物保護管理所の指導のもと、地域住民が自主的に行ったものであった。道士の招請、読経、神轎・パレードの編成、大供・小供等殆んどすべてが地域住民の自主性によるものであった。十一月二六日は平日の木曜日であったために若者の参加者はほとんどなかったが、各郷村の老年協会の老人が組織的に自主的に運営・参加していた。老人パワーの偉大さと老人達が如何に稲花会の復活を願っていたかを垣間見た。水利と信仰と娯楽の結合がこの稲花会であった。

註

(1) 『民国鄞県通志』輿地志卯編、廟社、遺徳廟。

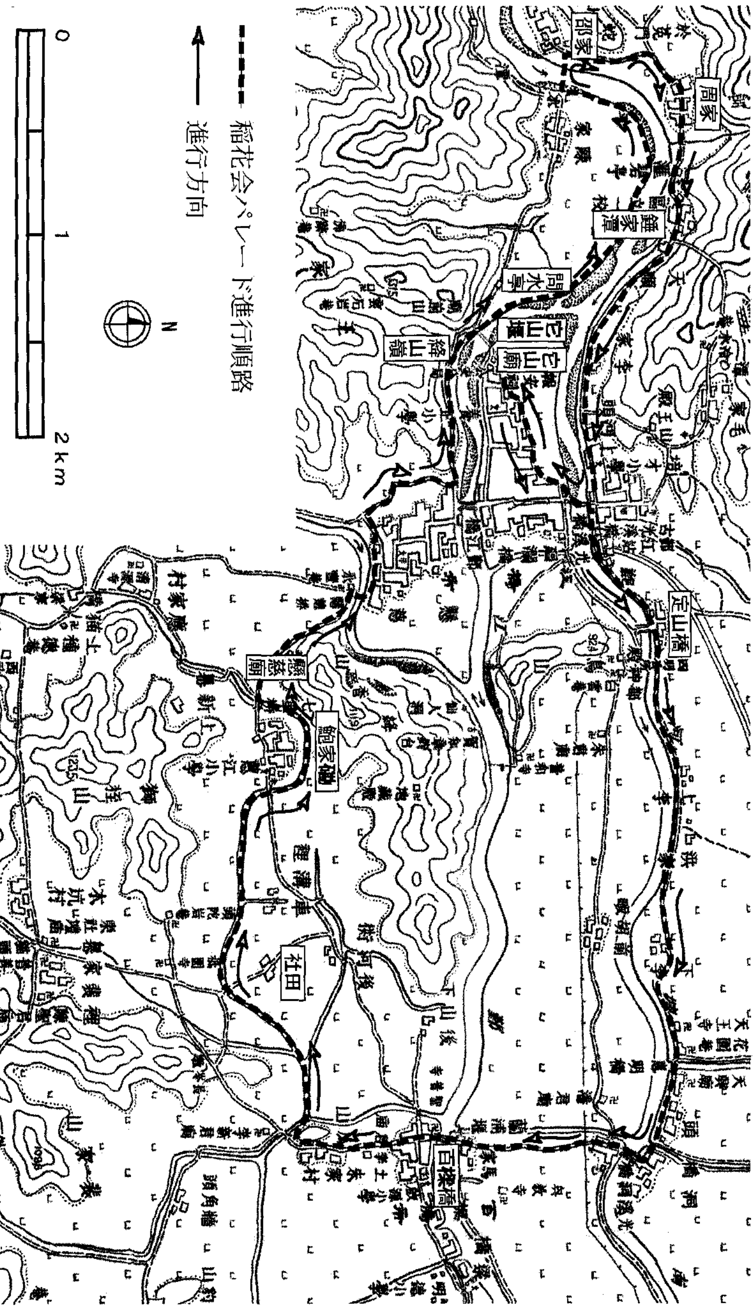
(2) 魏峴は南宋淳祐二年（一二四二）に『四明它山水利備覧』を著した。魏峴は同書に淘沙の項目を入れるなど、浚渫の重要性を述べている。

(3) 二十四件の儀仗とは古代の英雄が用いた武器の事である（陳思光氏の教授による）。

(4) 役人の使用する武器、主に護送のときに使用。硬木から作られた六尺ほどの棒で、槍などよりも長く作られている。水火とはすなわち、水＝黒、火＝赤の色を現わし、黒と赤で塗られている。護送中の役人董澄と薛覇が林冲を殺害しようと使った事がある（http://www.cnw.ne.jp/~unpuku/bugu/a1.html）。

(5) 軍中で発令のしるしとして用いた竿頭に鉄製のやじり状のものをつけた小旗（『中日大辞典』大修館書店）。

(6) 郎官は漢代の侍郎・郎中皆郎官という（『後漢書』明帝紀）。



稲花会パレード進行順路
進行方向
0
1
2 km
N
周家
部家
鍾家潭
問水亭
宅山堰
宅山廟
繹山嶺
定山橋
鮑家墩
懸慈廟
社田
百梁橋